ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（1）

中　澤　　務

1．はじめに

アンティフォン（Ἀντιφῶν）は謎に満ちたソフィストである。まず何よりも素性が不明確だ。彼はソクラテスの同時代人で，アテナイ人であったと考えられる[1)]。しかし，当時のアテナイでは，アンティフォンという名前は珍しいものではなかった。それゆえ，このソフィストの正体をめぐり，古来，諸説が入り乱れているのである。

紀元前５世紀において名前の知られたアンティフォンは，「ラムヌース区のアンティフォン」と呼ばれる人物である。この人物は弁論家として知られ，『四部作集（Tetralogiae)』ならびに数編の法廷演説が現存している。彼は寡頭制主義者であり，紀元前411年のいわゆる「四百人」寡頭派体制の樹立に貢献したが，その後，反逆罪で処刑された。もしソフィスト・アンティフォンがこの「ラムヌース区のアンティフォン」と同一人物であるとしたら，彼の素性は明確となる。（実際，古来，両アンティフォンは区別されず，あたかも同一人物であるかのように取り扱われることも多かった。）しかし，それを疑わせる有力な理由も存在している[2)]。

第一に，クセノフォンの証言がある。彼は『ソクラテスの思い出』1. 6. 1-15においてアンティフォンを登場させ，ソクラテスに対して批判的な発言をさせているが，そこでクセノフォンは，アンティフォンをわざわざ「ソフィストのアンティフォン」と呼んでいるのである。この呼び方は，「ラムヌース区のアンティフォン」以外に，少なくとも，もうひとりのアンティフォンが存在していたことを示唆するように思われる。

第二に，思想の整合性の問題がある。ソフィスト・アンティフォンは，その著作『調和について』の内容から，民主制の立場に立つ保守的な思想家と見られてきた[3)]。もしこの味方が正しいとしたら，両アンティフォンは異なる政治思想の持ち主であったことになるのである。

第三に，さまざまな著作間の文体上の相違という問題がある。紀元後2世紀の弁論家ヘルモゲネスは，アンティフォンの著作と伝えられる作者間の文体上の相違を根拠に，紀元前5世紀には多数のアンティフォンが存在していたと考え，ソフィストについても，その主著『真理について』と『調和について』の内容的相違から，アンティフォンという名の二人のソフィストが存在していたと主張した（cf. Morrison 1961 p.54）[4)]。ソフィスト・アンティフォンが「ラムヌース区のアンティフォン」と同一人物であったのかという問題だけでなく，そもそもソフィスト・アンティフォンが一人の人物であったのかということすら論争の対象となってきたわけである。

以上がソフィスト・アンティフォンの素性をめぐる問題であるが，アンティフォンを謎めいたソフィストにしている理由は，それだけではない。アンティフォンは，プロタゴラス，ゴルギアス，ヒッピアス，プロディコスなどのソフィストたちとは異なり，ソフィストについての主要な情報源であるプラトンの作品に登場していない[5)]。そのため，アンティフォンの思想がどのようなものであったのかを具体的に知ることは困難であり，それゆえ彼の思想を当時の思想的文脈の中に位置づけることは難しかったのである。

以上のような理由から，ソフィスト・アンティフォンは20世紀になるまで，マイナーなソフィストとして取り扱われることが多く，その重要性が認識されることはほとんどなかったといってよい。しかし，20世紀初頭にアンティフォンの著作の新発見の断片群（以下「DK44断片群」と呼ぶ）が公表されて以来，アンティフォンの思想は，紀元前5世紀における「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」をめぐる問題の中核に位置づけられるようになり，ソフィストの思想を解明するための主要な鍵の一つと見なされるようになった[6)]。それ以来，この断片群を中心に，一世紀近くにわたって論争が続いている。論争は21世紀に

入っても続いており，2002年にはペンドリックによる最新のテキスト研究（Pendrick 2002）と，ガガーリンによる研究書（Gagarin 2002）が刊行されている[7]。さらに，2004年にはノモスとピュシスのアンチテーゼをテーマとするシンポジウムがアテネで開催され，2007年にはその成果が出版されている（Pierris 2007）。そこでも，アンティフォンの思想は大きな注目を集め，論争の一つの焦点になっている[8]。

ソフィスト・アンティフォンの倫理思想に対する以上のような欧米での関心の高さに比較して，わが国での関心は薄いといってよい。これは，アンティフォンに限らず，ソフィストの思想全般に対する過小評価に由来するものと考えられる。ヨーロッパ各国（特に伊・独・仏）における関心の高さと比較するとき，この関心の薄さはわが国の顕著な特徴のひとつといえるのではないだろうか[9]。本論考は，このような状況を背景に，ソフィスト・アンティフォンの倫理思想の全体像とその意義を詳細に論じようとするものである[10]。

本論文の構成を簡単に示しておこう。まず第2章において，ソフィスト・アンティフォンの思想をめぐる論争の歴史を振り返り，問題のポイントを押さえておくことにしたい。続く第3章では，問題のDK44断片群の最新の校訂テキストとその日本語訳を示す。これをもとにして，以後DK44断片群の検討を順次行なっていくが，本論文ではこれまでの主流の見方を批判して，近年広まりつつある新しい見方を提示していく。そのために，まず第4章において，新しい見方に対比されるべきこれまでの主流（「ピュシス派」と呼ぶ）の見方の見解をまとめ，以後，それに対する批判のかたちで議論を進めていく（以下，第5章～第11章は，次号以降に掲載予定の「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（2）」および「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（3）」で論じる）。第5章，第6章，第7章，第8章が本論文の中核であり，DK44断片群の内容を詳細に検討し，新しい解釈を提示していく。その後，第9章と第10章では，明らかになったDK44断片群の倫理思想をそれ以外のアンティフォンの断片の内容と突合せ，ソフィスト・アンティフォンの倫理思想の全体像を再構成して

いく作業を行なう。最後に，第11章で，アンティフォンの倫理思想の意義をまとめることにしたい。

2．アンティフォン研究史：DK44断片群発見以前以後

2.1　DK44断片群公表以前のアンティフォン

20世紀初頭（1915年）以前においては，アンティフォンは，すでに述べたような理由によって，マイナーなソフィストの一人と見なされ，それほど重要視されることはなかった。アンティフォンがノモスとピュシスのアンチテーゼを取り扱っている断片はDK44断片群以外には存在せず，そのため，彼はこの論争に無縁のソフィストと見なされていた[11)]。また，ノモスとピュシスの問題を離れても，1915年以前においては，アンティフォンの思想を明確に捉えることは難しかった[12)]。アンティフォンの主要著作は『真理について』と『調和について』の二つであるが，いずれも断片的な伝承しかなく，それぞれの著作の全体像を知ることは困難だからである。『真理について』に属すると伝えられる断片の内容は多岐に渡り，その全体像を再構成することは非常に難しい（cf. Pendrick 2002 p.35 ff.)。『調和について』は，倫理的な内容であったことは想像できるが，アフォリズム的な断片が多く[13)]，全体として何をどのように論じたものであったのかは不明な点が多い[14)]。そもそも，すでに述べたとおり，この二つの著作が本当に同一著者によるものであるか否かさえ確定的ではなかったのである。

このような事情から，1915年以前においては，アンティフォンはソフィストの思想をめぐる議論の中ではほとんど論じられないか，論じられるとしても，その話題は限られたものにならざるをえなかったのである[15)]。

2.2　DK44断片群の公表

ところが，すでに述べたとおり，このような状況は20世紀初頭に大きく変化し，アンティフォンは一躍大きな注目を浴びることになる。エジプトのオクシリンコスで発見されたパピルス群（オクシリンコス・パピルス：Oxyrhynchus

Papri（以下 “P. Oxy.”））の中に，ソフィスト・アンティフォンの著作と推定されるいくつかの断片が含まれていたからである。これらの断片群は，ディールス・クランツの資料集（Diels and Kranz 1952）に断片番号44の断片として採録された。

DK44断片群は，三つの断片（DK44(a), DK44(b), DK44(c)）からなる断片群であり，オクシュリンコス・パピルスの中でソフィスト・アンティフォンに帰属させられている断片をまとめたものである。これらの断片の素材となっているパピルス断片は三つ存在する。すなわち，P.Oxy. 1364, 1797, 3647である。このうちP.Oxy. 1364は二つのパピルス片（Fr.1およびFr.2）からなり[16]，校訂テキストは1915年に発表された（Grenfell and Hunt 1915）。これがDK44(a)および（b）である。

このうち，DK44(a) は，2世紀アレクサンドリアの文法家で弁論家用語辞典の編者であるハルポクラティオンによる引用（s.v. ἄγοι）と文言が一致する部分（I. 18-20）があり，これによって，この断片がアンティフォンによるものであることが判明した（cf. Pendrick 2002 p.316）。ハルポクラティオンの証言から，この断片が『真理について』の一部であることは明らかである[17]。それが，少なくとも二巻からなるこの著作の第1巻・第2巻のいずれに属するのかはわからない。しかし，おそらく，議論の内容からみて，第1巻の部分であったと推定するのが妥当であろう。

これに対してDK44(b) のほうは，アンティフォンの著作に由来することを確証する証拠はない。しかし，このパピルス片はDK44(a) のものと字体が一致し，同一写本に属していたと推定されることと，内容的な類似が見られることから，『真理について』第1巻に属する断片であるとみなすのが妥当である。

このように，DK44(a) と（b）は『真理について』第1巻の一部である蓋然性が高いのであるが，両者の先後関係を確定することは難しい。1984年にDK44(b)の新しい校訂を発表したフンギは，パピルスの状態を根拠にして，(b)のほうが（a）よりも前に位置していたと主張した（Funghi 1984 p.1）。この推測は，デクレヴァ＝カイッツィが支持しているが（Decleva Caizzi and

Bastianimi 1989 p.180, 183)，しかし，フンギのあげる証拠は必ずしも強力なものとはいえないように思われる（cf. Pendrick 2002 pp. 316-7)[18]。

さて，以上の二つの断片に対して，DK44(c) はP.Oxy. 1797という別のパピルス断片に由来している。このP.Oxy. 1797は，字体，文章の特徴，カラムの長さなどの点でP.Oxy. 1364と共通点もあるとはいえ，一致しているわけではなく，したがって同一筆記者によるものである保証はない。しかし，それにもかかわらずこの断片は，そこで論じられているノモス批判の議論がDK44 (a) における議論の内容とよく似ていると考えられたため，アンティフォンのものと推定されることになったのである (cf. Pendrick 2002 pp.317-318)。筆者も，同様の理由から，この断片をアンティフォンのものと見なしてよいと考えるが[19]，その場合われわれは，両パピルス間の相違についてどのように考えたらよいのであろうか？　二つの可能性を想定しうる。ひとつは，DK44(c) は同じ『真理について』第1巻の断片であるが，実は別の筆記者による写本が2冊あったという可能性である（cf. Bignone 1938 pp. 126-127; Diels and Kranz 1952 p.353)。もうひとつは，この断片はアンティフォンの別の著作に由来するものであり，彼はその著作の中で『真理について』第1巻と同じような議論をしていたと考えるものである (cf. Grenfell and Hunt 1922)。いずれにせよ，もしDK44(c)がアンティフォンのものであるとしたら，このいずれかであろう。

さて，このようにして20世紀の初頭に，アンティフォンのものである可能性の高い断片が相次いで公表された。これによって，アンティフォンの倫理思想をめぐる研究は大きな展開を遂げることになるのだが，20世紀後半になってもう一つの新しい付加がなされた。すなわち，P.Oxy. 3647が，P.Oxy. 1364のうちの一枚（DK44(b) に相当するFr.2）に接続するパピルス片であることが判明したのである。これをもとに，DK44(b) の新しい校訂が1984年に公表された（Funghi 1984)。変更点は二つある。一つは新たに第IIIカラムと第IVカラムが付加されたことであり，もう一つは，第IIカラムの一部の欠落部分が補完され，より正確な校訂になったことである。この補完は，DK44(c) の解釈にとって極めて重要な意味を持っている[20]。

いずれにせよ，以上述べてきた理由から，各断片の真正性は断片によって程度が異なる。すなわち，DK44(a) はアンティフォンの著作の断片と見なしてよく，DK44(b) についても同程度の信頼性を持つと考えてよい。しかし，これらに比べるとDK44(c)の信頼性はそれほど高いものではない。われわれは，これらの資料的信頼度の差異に十分に注意を払う必要がある。

2. 3　DK44断片群公表以後のアンティフォン

さて，以上のようなDK44断片群の発表により，アンティフォンをめぐる研究状況は大きく変化することになった。すでに述べたとおり，この断片群が研究者の大きな関心を引いた理由は，議論の主題がノモス－ピュシスのアンチテーゼにあり，両者の対立に関して，それまでのどのソフィストの資料にも見られないような刺激的な議論を展開しているからであった。とりわけ，ピュシスの側に立った徹底的なノモス批判の議論は，それまで知られていたトラシュマコスやカリクレスの反道徳主義と同じ立場を鮮明に打ち出したものとして，大きく注目されることになった。このようにして，それまでノモス－ピュシスの論争とは無縁のソフィストと見なされていたアンティフォンは，一躍この論争の主役に祀り上げられることになったのである。

これによって，それまでにはない新しい問題が生じてきた。すなわち，このDK44断片群でのアンティフォンの主張は，それまで知られていた断片から想像されるアンティフォン像から大きく隔たっていたのである。すでに述べたように，それまではアンティフォンは保守的な倫理思想家と見られていた。もしアンティフォンがラディカルな批判的議論を展開した思想家であるとしたら，この断片群におけるアンティフォンの思想は，それ以外の断片，とりわけ『調和について』の思想内容とどのように整合させることができるのであろうか？[21)]

それだけではない。肝心のDK44断片群の解釈に関しても，いまだに論争が続いている。当初一般的に受け入れられていた，ピュシスの立場に立つラディカルな倫理思想家というイメージは，20世紀後半になってさまざまな疑いを投

げかけられ批判されてきた。現在では，より慎重な見方も提出され，アンティフォンの倫理思想に関して様々な可能性が示されている状況である[22)]。

3．DK44断片群：テキストと翻訳

アンティフォンの倫理思想の具体的な考察に入る前に，ここでDK44断片群の校訂テキストと筆者による日本語訳を示しておくことにしよう。最初にパピルス断片の表記について簡単に説明しておく。パピルス断片の文章は一行数単語の細長いカラムを並べるかたちで記述されており，校訂ではそれぞれの断片ごとにカラム番号が付され，一枚数カラムで構成されている。パピルスは欠損が多く，推測による補完が可能な部分には，推測されたテキストが示されている。（推測は，校訂者により様々に異なる。）現在，最も信頼できる校訂はデクレヴァ＝カイッツィ（Decleva Caizzi and Bastianimi 1989）とペンドリック（Pendrick 2002）によるものであるが，ここでは最新のペンドリックのものを使用する。

凡例

・ローマ数字I, II……はカラム番号，アラビア数字1, 2……は行番号を示す。
・原文における欠落箇所の推測による補完は［ ］で括る。
・ペンドリックの校訂に示された異読（apparatus criticus）は，ここでは示さない。
・補完を示す原文の［ ］記号は日本語訳には示さない。
・日本語訳における原文にはない訳者の補足は〔 〕で括る。その他，分かりやすさのために，〈 〉，－，（1）（2）（3）などの記号を挿入する。

DK44(a)（P.Oxy. 1364, Fr.1）

【テキスト】

…… (I.1-5) …… δικα[ιοσ]ύνη [δ'οὗ]ν τὰ τῆς πόλεως νόμιμα, [ἐν ᾗ] ἂν πολι[τεύ]ηταί τις, μὴ [παρ]αβαίνειν (I.6-11). χρῷτ'ἂν οὖν ἄνθρωπος μάλιστα ἑαυτῷ ξυμφ[ε]ρόντως δικαιο[σ]ύνῃ, εἰ μετὰ μὲν μαρτύρων τοὺς νόμους μεγάλους ἄγοι, μονούμενος δὲ μαρτύρων τὰ τῆς φύσεως (I.12-23)˙ τὰ μὲν γὰρ τῶν νόμων [ἐπίθ]ετα, τὰ δὲ [τῆς] φύσεως ἀναγκαῖα (I.23-27)˙ καὶ τὰ [μὲν] τῶν νό[μω]ν ὁμολογη[θέντ]α οὐ φύν[τα ἐστί]ν, τὰ δὲ [τῆς φύσ]εως φύν[τα οὐχ] ὁμολογηθ[έ]ντα (I. 27-

II.1). τὰ οὖν νόμιμα παραβαίνων ἐὰν λάθῃ τοὺς ὁμολογήσαντας καὶ αἰσχύνης καὶ ζημίας ἀπήλλακται· μὴ λαθὼν δ'οὔ (II.3-10[23]) · τῶν δὲ τῇ φύσει ξυμφύτων ἐάν τι παρὰ τὸ δυνατὸν βιάζηται, ἐάν τε πάντας ἀνθρώπους λάθῃ, οὐδὲν ἔλαττον τὸ κακόν, ἐάν τε πάντες ἴδωσιν, οὐδὲν μεῖζον (II.10-20) · οὐ γὰρ διὰ δόξαν βλάπτεται, ἀλλὰ δι' ἀλήθειαν (II.21-23). ἔστι δὲ πάντων ἕνεκα τούτων ἡ σκέψις, ὅτι τὰ πολλὰ τῶν κατὰ νόμον δικαίων πολεμίως τῇ φύσ[ει] κεῖται (II.23-30) · νενο[μο]θ[έ]τηται γὰρ [ἐ]πί τε τοῖς ὀφ[θ]αλμοῖς, ἃ δεῖ αὐτο[ὺ]ς ὁρᾶν καὶ ἃ οὐ [δε]ῖ· καὶ ἐπὶ τοῖς ὠσίν, ἃ δεῖ αὐτὰ ἀκούειν καὶ ἃ οὐ δεῖ· καὶ ἐπὶ τῇ γλώττῃ, ἃ τ[ε] δεῖ αὐτὴν λέγειν καὶ ἃ οὐ δεῖ· καὶ ἐπὶ ταῖς χερσίν, ἃ τε δεῖ αὐτὰς δρᾶν καὶ ἃ οὐ δεῖ· καὶ ἐπὶ τοῖς ποσίν, ἐφ'ἃ τε δεῖ αὐτοὺς ἰέναι καὶ ἐφ'ἃ οὐ δεῖ· καὶ ἐπὶ τῷ νῷ, ὧν τε δεῖ αὐτὸν ἐπιθυμεῖν καὶ ὧν μή (II.30-III.18). [ἔστι]ν οὖν οὐδὲν τ[ῇ] φύσει φιλιώτ[ερ]α οὐδ'οἰκειότε[ρα] ἀφ'ὧν οἱ νόμο[ι ἀ]ποτρέπουσι τ[οὺς] ἀν[θ]ρώπ[ους] ἢ ἐφ'ἃ [προτρέ]πουσ[ιν] (III.18-25) · τ[ὸ δὲ] ζῆν [ἐ]στὶ τῆς φύσεως κ[αὶ τ]ὸ ἀποθαν[εῖ]ν (III.25-28) · καὶ τὸ μὲν [ζ]ῆν αὐτ[ῇ] ἐστι[ν ἀ]πὸ τῶν ξυμ[φερό]ντω[ν,] τὸ δὲ ἀ[ποθανεῖν] ἀπὸ τ[ῶν μὴ ξυμ]φερόντω[ν (III.28-IV.1). τὰ] δὲ ξυμφέρ[οντα] τὰ μὲν ὑπ[ὸ τῶν] νόμων κε[ί]μενα δεσμ[οὶ] τῆς φύσεώς ἐ[στι,] τὰ δ'ὑπὸ τῆς φύσεως ἐλεύθερα (IV.1-8). [οὔ]κουν τὰ ἀλγύνοντα ὀρθῷ γε λ[ό]γῳ ὀνίνησιν τὴ[ν] φύσιν μᾶλλον ἢ τὰ εὐφραίνοντα (IV.8-14) · οὔκουν [ἃ]ν οὐδὲ ξυμφέροντ'εἴη τὰ λυποῦ[ντα] μᾶλλον ἢ τ[ὰ ἥ]δοντ[α] (IV.14-18). τὰ γὰρ τῷ ἀλη[θε]ῖ ξυμφέρ[οντ]α οὐ βλάπ[τει]ν δεῖ ἀλ[λ'ὠ]φ[ε]λεῖν (IV.18-22). τὰ τοίνυ[ν] τῇ φύσει ξυμφέροντα τ[α]υτ[(IV.22-24) .... desunt 2 vel 3 lineae ...]οτι a[....]απ[....] ανα[....]καιοι [....]νται (IV.25-32) · κα[ὶ οἵτινε]ς ἂν πά[θόν]τες ἀμύνων[ται κ]αὶ μὴ αὐτοὶ [ἄρχ]ωσιν τοῦ δρᾶν (IV.33-V.3) · [καὶ ο]ἵτινε[ς] ἂν [τοὺς] γειναμέ[νου]ς καὶ κακοὺς ὄντας εἰς αὑτοὺς εὖ ποιῶσιν (V.3-8). καὶ οἱ κατόμνυσθαι διδόντες ἑτέροις, αὐτοὶ δὲ μὴ κατομνύμε[νοι (V.8-13).] καὶ τούτων τῶν εἰρημένων πόλλ'ἄν τις εὕροι πολέμια τῇ φύσει (V.13-17) · ἔνι γε αὐτοῖς ἀλγύνεσθαί τε μᾶλλον ἐξὸν ἥττω, καὶ ἐλάττω ἥδεσθαι ἐξὸν πλείω, καὶ κακῶς πάσχειν ἐξὸν μὴ πάσχειν (V.17-24). εἰ μὲν οὖν τις [τ]οῖς τοιαῦτα προ⟨σ⟩[ι]εμένοις ἐπικού[ρ]ησις ἐγίγνε[το] παρὰ τῶν νό[μ]ων, τοῖς δὲ μὴ [π]ρο⟨σ⟩ιεμένοις ἀλ[λ'ἐ]ναντιουμέ[ν]οις ἐλάττωσις, οὐκ ἀν[ωφελὲς ἂν] ἦν τ[ὸ τοῖς νό]μοις πεί[θεσθαι (V.25-VI.3) · νῦν] δὲ φαίνε[ται τοῖς] προσιεμ[ένοις] τὰ τοιαῦτα τὸ ἐ[κ] νόμου δίκαι[ον] οὐχ ἱκανὸν ἐπικουρεῖν (VI.3-9) · ὅ γε πρῶτον μὲν ἐπιτρέπει τῷ πάσχοντι παθεῖν καὶ τῷ δρῶντι δρᾶσαι (VI.9-13) · καὶ οὔτε ἐνταῦθα διεκώλυε τὸν πάσχοντα μὴ παθεῖν οὐδὲ τὸν δρῶντα δρᾶσαι (VI.14-18) · εἴς τε τὴν τιμωρίαν ἀναφερόμενον οὐδὲν ἰδιώτερον ἐπὶ [τ]ῷ [π]επονθότι ἢ τῷ δεδρακό[τι (VI.19-25) ·] περαι γὰρ α[ ]α[.]το [..]υστ [ ]ρ[.....]ας ὡς ἔπαθεν[..] δύνασθαι απ[...]ῃ δικην[...]ν· ταῦτα δὲ κ[α]ταλείπετα[ι] καὶ τῷ δράσαντ[ι ἀ]ρνεῖσθαι (V.25-33) ····· (VII) ·····

【日本語訳】

……判読不能（I. 1-5）……それゆえ，正義とは，〈その人が市民として属しているポリスで定められている様々な規則を逸脱しないこと〉である（I.6-11)。そうすると，人間は，目撃者たちと一緒にいるときにはノモスを重視し，目撃者たちがいないときにはピュシスに属する事柄を重視するならば，自分にとって最も利益にかなう仕方で正義を使うことになるであろう(I.12-23)。というのも，ノモスに属する事柄は〔人為的に〕設定されたものであるが，これに対して，ピュシスに属する事柄は必然的なものであり（I.23-27)，さらには，ノモスに属する事柄は，同意に基づくものであって，ピュシスが生んだものではないのに対して，ピュシスに属する事柄は，ピュシスが生んだものであって，同意に基づくものではないからである（I.27-II.1)。

それゆえ，ノモスを逸脱するときに，もしその人が，〔ノモスに〕同意している人々に気づかれないなら，彼は恥と罰から逃れることができる。だが，気づかれれば，逃れられない(II.3-10)。

ところが，これに対して，ピュシスと共に生まれるものの何かに対して，その可能な限度を超えて無理強いをするならば，たとえすべての人々に気づかれないとしても，悪がより小さくなるわけではないし，すべての人々が見ていたとしても，悪がより大きくなるわけでもない（II.10-20)。なぜなら，その人は，思いなしによってではなく，真実によって害されているからである（II.21-23)。

さて，ノモスに従う正義の多くがピュシスと敵対的な状態に置かれているという事実を示すために，考察を行なう（II.23-30)。ノモスが設定されているのは，目に対しては何を見て何を見るべきでないかについて，耳に対しては何を聞き何を聞くべきでないかについて，舌に対しては何を言い何を言うべきでないかについて，手に対しては何をして何をすべきでないかについて，足に対してはどこに行ってどこに行くべきでないかについて，心に対しては何を欲して何を欲するべきでないかについてである（II.30-III.18)。それゆえ，ノモスが人々に禁止する事柄と勧める事柄では，どちらかがよりピュシスに親和的であるとか親近的であるとかということはない（III.18-25)。

これに対して，生きることや死ぬことはピュシスに属する事柄である（III.25-28)。すなわち，生きることはピュシスにとって利益になることであり，死ぬことはピュシスにとって利益にならないことである（III.28-IV.1)。

ところで，この〈利益になること〉であるが，ノモスによって設定されている場合には，それはピュシスを束縛する。しかし，ピュシスによる場合には，それは自由である(IV.1-8)。

さて，少なくとも正しい説明をする限り，苦しいことが楽しいことよりもピュシスに利益を与えることはない（IV.8-14)。また，痛いことが快いことよりも利益を与えることもない

(IV.14-18)。なぜなら，真実に利益になることは害することがあってはならず，むしろ益さなければならないからである(IV.18-22)。それゆえ，ピュシスの利益になることは(IV.22-24)

……判読不能（IV.25-32）……（1）被害を受けて，自分の身を守ろうとしているが，自分のほうから先に手を出したわけではない人たち（IV.33-V.3)。あるいは，（2）生みの親が悪い人たちなのに，彼らによくしてやる人たち（V.3-8)。あるいは，（3）他の人たちのために宣誓をするが，自分は宣誓をしてもらえない人たち（V.8-13)。――ひとは，これら語られた事例の多くがピュシスに敵対的なものであることを見出すであろう（V.13-17)。というのも，これらの事例には，少ない苦しみで済むのに多く苦しむことや，悪いことをされないで済むのに悪いことをされることが含まれているからである（V.17-24)。

さて，もし，このようなことをすすんでしようとする人たちに対しては，ノモスから何らかの防御が生じ，それをすすんでしようとはせずにそれに反したことをしようとする人たちに対しては，損害が生じるのであれば，ノモスに従うことは利益のないこととはいえないだろう（V.25-VI.3)。

だが，実際には，このようなことをすすんでしようとする人たちにとって，ノモスから生まれる正しさは十分な助けにはならないように思われる（VI.3-9)。

第一に，それは，被害者が被害を受けるがままにし，加害者が危害を加えるがままにする(VI.9-13)。すなわち，〔事件が起こった〕まさにそのときには，それは，被害者が被害を受けるのを防ぎも，加害者が危害を加えるのを防ぎもしなかったのである（VI.14-18)。

また，それが〔加害者に〕罰を与えるときにも，それは，加害者よりも被害者のほうに親近的なわけではない（VI.19-25)。というのも，……被害を受けたことを……（VI.25-33)。

……判読不能（VII）……

DK44(b)（P.Oxy. 1364, fr.2 + P.Oxy. 3647）

【テキスト】

……（I）……ρων ἐπ[ιστάμε]θά τε κ[αὶ σέβομεν (II.1-2)·] τοὺς δὲ [τῶν τη]λοῦ οἰκ[ούν]των οὔτε ἐπι[στ]άμεθα οὔτε σέβομεν (II.3-6). ἐν τ[ο]ύτῳ οὖν πρὸς ἀλλήλους βεβαρβαρώμεθα (II.7-10)· ἐπεὶ φύσει γε πάντα πάντες ὁμοίως πεφύκ[α]μεν καὶ βάρβαροι καὶ Ἕλλην[ες] εἶναι (II.10-15). σκοπεῖν δ[ὲ] παρέχει τὰ τῶν φύσει[ ] ἀναγκαί[ων] πᾶσιν ἀν[θρώ]ποις (II.15-20)· π[ ] τε κατὰ τ[ ] δυνα[ ] καὶ ἐν[ ] (II.20-23) τοις οὔτε β[άρβα]ρος ἀφώρι[σται] ἡμῶν ο[ὐδεὶς] οὔτε Ἕλλην (II.24-27). ἀναπνέομέν τε γὰρ εἰς τὸν ἀέρ[α] ἅπαντες κατὰ τὸ στόμ[α] [κ]αὶ κατ[ὰ] τὰς ῥῖνας· κ[αὶ γελῶμε]ν χ[αίροντες καὶ] δακρύομε[ν] λυπούμενοι· καὶ τῇ ἀκοῇ τοὺς φθόγγους εἰσδεχόμεθα· καὶ τῇ αὐγῇ μετὰ τῆς ὄψεως ὁρῶμεν· καὶ ταῖς χερσὶν ἐργαζόμεθα· καὶ τοῖς ποσὶν βαδ[ίζο]μεν. υβ[ ] (II.27-III.12) ……（IV）……

【日本語訳】

……判読不能（Ⅰ）……〔近くに住んでいる人々のノモス〕をわれわれは知っているし，観察もしている（II.1-2)。これに対して，遠くに住んでいる人々の〔ノモス〕をわれわれは知らないし，観察もしていない（II.3-6)。すると，そのような場合には，われわれは互いに対して異邦人のような関係に置かれる(II.7-10)。なぜなら，少なくともピュシスにおいては，異邦人であれギリシャ人であれ，すべての人々がすべての点で同様の状態にあるからである(II.10-15)。

ピュシスにおいて，すべての人々に必然的な事柄を探求することができる（II. 15-20)。……判読不能（II.20-23）…… われわれは誰も，異邦人とかギリシャ人という境界線を引かれることはない（II.24-27)。なぜなら，われわれはすべて，口と鼻で空気を呼吸し，楽しいときには笑い，苦しいときには泣き，また，聴覚によって音を受け入れ，光によって視覚を使ってものを見[24]，手を使って作業をし，足を使って歩くのであるから（II.27-III.12)。……判読不能（IV）……

DK44(c)　(P.Oxy. 1797)

【テキスト】

[.....] τοῦ δικαίου [.....]ου δοκουν[..... (I.1-2) τὸ] μαρτυρεῖν [ἀλ]λήλοις τἀληθῆ [δίκαιο]ν νομίζεται [εἶναι] καὶ χρήσιμον [οὐδὲν] ἧττον εἰς [τὰ τῶν] ἀνθρώπων [ἐπιτ]ηδεύματα (I.3-9). [τοῦτο] τοίνυν οὐ δί[καιος] ἔσται ὁ ποιῶν, [εἴπε]ρ τὸ μὴ ἀδικεῖν [μηδ]ένα μὴ ἀδι[κού]μενον αὐτον [δίκ]αιόν ἐστιν (I.10-15)· ἀνάγ[κη] γὰρ τὸν μαρτυ[ροῦ]ντα, κἂν ἀλη[θῆ μ]αρτυρῇ, ὅμως [ἄλλον π]ως ἀδικεῖν (I.15-19)· [　　α]ὐτὸν ἀ[δι]κεῖσθαι [　　]νενε[　　(I.20-22) ἐ]ν ᾧ διὰ τ[ὰ ὑπ'ἐκείν]ου μαρτ[υρηθέν]τα ἁλίσκ[ε]ται ὁ καταμαρτυρούμενος καὶ ἀπόλλυσιν ἢ χρήματα ἢ αὑτὸν [δ]ιὰ τοῦτον ὃν οὐδὲν [ἀ]δικεῖ (I.23-30)· ἐν μὲν οὖν τούτῳ τὸν κατα[μ]αρτυρούμενον [ἀ]δικεῖ, ὅτι οὐκ ἀδι[κο]ῦντα ἑαυτὸν ἀ[δι]κεῖ (I.30-35)· αὐτὸς δ'ἀδικεῖ[ται ὑ]πὸ τοῦ καταμαρ[τυρηθ]έντος (I.35-37), ὅτι μι[σεῖται] ὑπ'αὐτοῦ τἀληθῆ μαρτυ[ρή]σας (I.37-II.2)· καὶ οὐ μόν[ον] τῷ μίσει, ἀλλὰ κ[αὶ] ὅτι δεῖ αὐτὸν τ[ὸν] αἰῶνα πάντα φυλάττεσθαι τοῦτο[ν] οὗ κατεμαρτύρ[η]σεν (II.2-8), ὡς ὑπάρχε[ι] γ'αὐτῷ ἐχθρὸς τοιο[ῦ]τος, οἷος καὶ λέγειν καὶ δρᾶν εἴ τι δύν[αι]το κακὸν αὐτόν (II.8-12). κα[ί]τοι ταῦτα φαίνεται οὐ σμικρὰ ὄντα τἀδικήματα, οὔτε ἃ αὐτὸς ἀδικεῖται οὔτε ἃ ἀδικεῖ (II.12-17)· οὐ γὰρ οἷόν τε ταῦτά τε δίκαια εἶναι καὶ τὸ μη[δ]ὲν ἀδικεῖν μη[δὲ] αὐτὸν ἀδικεῖσθαι (II.17-21), [ἀλ]λ'ἀνάγκη ἐστὶν [ἢ] τὰ ἕτερα αὐτῶν [δ]ίκαια εἶναι ἢ ἀμφότερα ἄδικα (II.22-25). φαίνεται δὲ καὶ τὸ δικάζειν καὶ τὸ κρίνειν καὶ τὸ διαιτᾶν, ὅπως ἂν περαίνηται, οὐ δίκαια ὄντα (II.25-30)· τὸ γὰρ [ἄ]λλους ὠφελοῦν ἄλ[λο]υς βλάπτει (II.30-32)· ἐν δὲ [τού]τῳ οἱ μὲν ὠφελού[μενο]ι οὐκ ἀδικοῦ[νται,

οἱ] δὲ βλαπτόμε[νοι ἀδικ]ῦντα[ι (II.32-36).....]μην[.....]ινου[.....] (II.36-38)

【日本語訳】

……判読不能（I. 1-2）……〈お互いに対して真実の証言をすること〉は正しいことであり，人々が生きていくうえで有用であると見なされている（I.3-9)。ところが，もし〈自分に不正をしていない者には，誰にも不正をしてはいけない〉という原則が正しいことであるとしたら，これ〔真実の証言〕をする者が正しい人だとはいえなくなる（I.10-15)。なぜなら，証言する者は，たとえそれが真実の証言だったとしても，にもかかわらず，ある意味において他者に不正を加えていると見なさざるをえないからである（I.15-19)。……自分が不正を加えられている（I. 20-22）……その場合，その人のなした証言によって不利な証言をされた者は，敵の手に落ちて，自分は何の不正もしていないその人のために，財産や自分自身〔の命〕を失ってしまうからである（I.23-30)。この場合，その人は，不利な証言をされた者に対して不正をしている。なぜなら，彼はその人に対して不正をしていないのに，その人は〔彼に〕不正をしているからである（I.30-35)。その人は，不利な証言をされた者によって不正をされてはいない（I.35-37)。じっさい，その人は，真実の証言をすることによって，彼から憎まれ（I.37-II.2)，さらには，単に憎まれるというだけでなく，全時間にわたって，その人が不利な証言をした者から自分の身を守らねばならないからである（II.2-8)。というのも，その人は，もしその人に何か悪いことができるなら，言葉においても行為においてもそれをすることのできる，そのような敵を持つことになるのであるから（II.8-12)。しかし，その人が受ける不正も，その人が為す不正も，明らかに小さな不正ではない(II.12-17)。

じっさい，これらのことと，〈誰にも不正をせず，自分も不正をされない〉〔という原則〕が，〔同時に〕正しいものであることはできない（II.17-21)。むしろ，それらのうちのいずれかが正しいか，あるいはどちらも不正でなければならないのである（II.22-25)。

だが明らかに，判決することも，判定することも，仲裁することも，それがいかに行なわれようとも正しいことではない（II.25-30)。というのも，ある人たちを益するものは，別のある人たちに害を与える（II.30-32)。そして，そこにおいては，益を受ける人たちは不正をされてはいないが，害を受ける者たちは不正をされており（II.32-36）……判読不能（II.36-38）……

4．DK44断片群をめぐる〈ピュシス派〉の解釈とその問題点

すでに述べたとおり，DK44断片群が公表されると，研究者たちはまず，そこに明らかに見て取れるノモスとピュシスの対立図式と，ノモスに対するアン

ティフォンの強い批判的態度に着目した。そして多くの研究者は，ノモスに対するアンティフォンの執拗な批判を，アンティフォンがノモスに倫理的規範としての資格を認めていない証拠と見なした。このとき，研究者たちが注目したのがピュシスであった。アンティフォンはノモスにピュシスを強く対立させた批判を展開している。それゆえ多くの研究者たちの目には，アンティフォンは，ノモスから倫理的規範の資格を剥奪する代わりに，ピュシスを新たな倫理的規範として提示しているのだと解釈するのが自然にみえた。すなわち，DK44断片群においてアンティフォンが展開している議論の趣旨と目的は，「人間のピュシスに反するものとして，ノモスから倫理的規範としての資格を剥奪し，その代わりにピュシスを新たな倫理的規範にすえて，これによってノモスに基づかないまったく新しいピュシス中心の倫理を提唱する」ことだということになる。

この場合，DK44断片群の議論は，次のような特徴を持つことになるだろう。

①それは規範倫理をめぐる議論であり，アンティフォンは倫理の核となる規範的原理の探求をしている。

②探求のために，アンティフォンはノモスとピュシスという二つの規範的原理の候補を提示し，両者のいずれが規範的原理としてふさわしいのかを比較検討している。

③比較の結果として，アンティフォンはノモスを規範的原理と見なす従来の倫理を否定し，ノモスの代わりにピュシスを倫理的原理にすえた，ノモスに依存しないまったく新たな倫理を提唱している。

以上のような見方を共有する解釈を，ひとまとめにして〈ピュシス派〉の解釈と呼ぶことにしよう。

この〈ピュシス派〉の解釈は，さらに以下のような二つのタイプに分類できるように思われる。これは，アンティフォンが具体的にどのような規範的倫理を提唱しようとしているのかをめぐる解釈の違いによるものである。

A. インモラリズム説

この解釈では，ピュシスという規範的原理は，人間の欲求の充足や快楽の追及と密接に関係する。アンティフォンはノモスを，人間の欲求充足と快楽追及を邪魔し，欲求の不充足と苦痛をもたらすものとして捉え，それゆえにノモスを批判している。したがって，アンティフォンが提唱しようとしている新しい倫理とは，ノモス（社会的モラル）を否定して，自己の欲求の充足を推奨する利己主義的な倫理であることになる[25)]。

このようなインモラリズムの立場は，通常トラシュマコスやカリクレスの倫理的立場と考えられているものと共通性を持つ。それゆえ，この立場に立つ研究者は，彼らを一つのグループにまとめ，ノモス－ピュシスのアンチテーゼが当時のソフィスト運動にもたらした典型的な倫理的影響を見ることになった。

B. コスモポリタニズム説

インモラリズム説と同様の視点に立ちながら，そこからまったく異なる倫理的含意を読み取ろうとするのがコスモポリタニズム説である。この説の形成においては，DK44(b) 断片の与えた影響が大きいように思われる。この短く不完全な断片において，アンティフォンは，ギリシャ人と異邦人の間の区別をピュシスを根拠にして否定しているように思われる。すなわち，ピュシスという側面から人間を見れば，すべての人間は同じものである。それゆえ，人間の間の文化的な差別を作り出しているノモスを排除すれば，「われわれは互いに対して異邦人のような関係に置かれる」ことになるのである。もし，このような視点からDK44断片群全体を見るなら，アンティフォンがノモスを批判するのは，ノモスが人間の生物学的普遍性（ピュシス）を歪める文化的虚構だからだということになる。すなわち，「楽しいときには笑い，苦しいときには泣く」のが人間すべてに共通する人間性であるのに，ノモスはそれに不当に介入して，「笑ってはならない，泣いてはならない」と命じ，人間性を歪めるのである（cf. DK44(a) II.30-III.25)。

ここでは人間のピュシスは，個々の人間の欲求や快楽追及に限定されるもの

ではなく，むしろ人間の持つ〈自然な姿〉である。この人間の自然の中には，他者に対する同情心や利他心が含まれていてもおかしくはない。それゆえ，この立場は，人間を利己的な存在と捉えるインモラリズム説とは異なるものといえる。

以上のような視点に立つと，アンティフォンが提唱している新たなピュシス中心の倫理とは，普遍的な人間性に立ち返り，それを回復させようとするものだということになるだろう。これは，ノモスが与える文化相対的で恣意的な命令を拒絶し，どんな人間もが持っている共通の人間性を尊重して，その自然な要求に従うことをよしとする倫理を意味する。それゆえ，このような倫理は，文化的差異の超越を目指すコスモポリタニズムの倫理であることになる[26)]。

さて，以上のような〈ピュシス派〉の解釈は，DK44断片群発見以来，長く支持されてきた主流派の解釈であった。しかし，このような見方が十分なテキスト上の裏づけを持つものかといえば，それは違うといわざるをえない。大きな疑問を二つ指摘しよう。

［疑問1］DK44断片群の議論は，本当に「規範性」をめぐる議論であり，アンティフォンはピュシスに規範性を付与しようとしているのであろうか？　テキストから読み取れるのは，ノモスとピュシスが互いに敵対であるという指摘のみであり，そこからピュシスを規範とした新たな倫理を提唱するような明確な発言は見出せない。

［疑問2］アンティフォンは，そもそも，ノモスから規範性を奪おうとしているのだろうか？　たしかに，ノモスに対するアンティフォンの批判は厳しい。しかし，アンティフォンは，だからノモスを排除せよなどとは一切述べていないのである。アンティフォンがテキストの中で実際に行なっているのは，ノモスは規範として重大な欠陥や矛盾を抱えているという事実の指摘である。これと，ノモスの規範性の否定との間には，大きなギャップがある。

以上のような問題があるにもかかわらず，〈ピュシス派〉の解釈は20世紀を通して大きな影響力を与え続けた。しかしこの見方は，20世紀後半になると，

様々な視点から疑問が投げかけられていくことになる。それゆえ，現在では，単純にこのような立場を信じる研究者は，少なくとも専門的研究の場面においては，もはやほとんど存在しないといってよいであろう。しかし，そうした専門的研究の場面を一歩外に出ると，この立場はいまだに根強く信じられているように思われる。

それゆえ，われわれは，テキストを詳しく検討する作業を通して，このような見方が実際にはテキスト上の根拠のないものであることを明らかにしていく必要がある。この作業を通して，DK44断片群に対するより妥当な見方が明らかになるであろう。

（続く）

文献表

Avery, H. C. (1982), 'One Antiphon or Two?' *Hermes*, 110, 145-58.

Bignone, Ettore (1938), *Studi sul Pensiero Antico* (Luigi Loffredo).

Bilik, Ronald (1998), 'Stammen P.Oxy. XI 1364 + LII 3647 und XV 1797 aud der Aletheia des Antiphon?' *TYCHE*, 13, 29-49.

Buchheim, Thomas (2007), 'Nomos on Physis', in Apostolos L. Pierris (ed.), *Pierris (2007)* (Greece: Patras), 283-304.

Decleva Caizzi, F. and Bastianimi, G. (eds.) (1989), *Corpus dei Papri Filosofici Greci e Latini* (1-1; Firenze: Leo S. Olschki).

Diels, H. and Kranz, W. (1952), *Die Fragmente der Vorsokratiker* (Weidmann).

Dodds, E. R. (1954), 'The Nationality of Antiphon the Sophist', *Classical Review*, n.s. 4, 94-95.

Field, G. C. (1967), *Plato and his Contemporaries* (Methuen).

Funghi, M. S. (1984), '3647. Antiphon, περὶ ἀληθείας (Addendum to 1364)', *The Oxyrhynchus Papri*, 52, 1-5.

Gagarin, Michael (1990), 'The Ancient Tradition on the Identity of Antiphon', *Greek Roman and Byzantine Studies*, 31, 27-44.

——— (2002), *Antiphon the Athenian: Oratory, Law, and Justice in the Age of the Sophists* (University of Texas Press).

——— (2007), 'Nomos and Physis in Antiphon', in Apostolos L. Pierris (ed.), *Pierris (2007)* (Greece: Patras), 355-80.

Gomperz, Heinrich (1912), *Sophistik und Rhetorik* (B. G. Teubner).

Grenfell, B. P. and Hunt, A. S. (1915), '1364. Antiphon Sophistes, Περὶ Ἀληθείας, i.' *The*

Oxyrhynchus Papri, 11, 92-103.

——— (1922), '1797. Antiphon Sophistes, Περὶ Ἀληθείας, i?' *The Oxyrhynchus Papri*, 15, 119-22.

Grote, George (1850), *History of Greece* (John Murray).

Guthrie, W. K. C. (1871), *The Sophists* (Cambridge U. P.).

Havelock, Eric A. (1957), *The Liberal Temper in Greek Politics* (Yale University Press).

Heinimann, Felix (1945), *Nomos und Physis: Herkunft und Bedeutung einer Antithese im griechischen Denken der 5. Jahrhunderts* (F. Reinhardt).

Kerferd, G. B. (1956-7), 'The Moral and Political Doctrines of Antiphon the Sophist. A Reconsideration', *Proceedings of the Cambridge Philological Society*, n.s. 4, 26-32.

——— (1981), *The Sophistic Movement* (Cambridge U. P.).

Luginbill, Robert D. (1997), 'Rethinking Antiphon's Peri Aletheias', *Apeiron*, 30, 163-87.

Morrison, J. S. (1955), 'Socrates and Antiphon', *Classical Review*, n.s. 5, 8-12.

——— (1961), 'Antiphon', *Proceedings of the Cambridge Philological Society*, n.s. 7, 49-58.

Moulton, Carroll (1972), 'Antiphon the Sophist, On Truth', *Transactions of the American Pholological Association*, 103, 329-66.

Narcy, Michel (2007), 'Three Versions of the Nomos-Phusis Antithesis: Protagoras, Antiphon, Socrates', in Apostolos L. Pierris (ed.), *Pierris (2007)* (Greece: Patras), 381-400.

Nill, Michael (1985), *Morality and Self-Interest in Protagoras Antiphon and Democritus* (E. J. Brill).

Pendrick, Gerard (1987), 'Once Again Antiphon the Sophist and Antiphon of Rhamnus', *Hermes*, 115, 47-60.

——— (1993), 'The Ancient Tradition on Antiphon Reconsidered', *Greek Roman and Byzantine Studies*, 34, 215-28.

——— (2002), *Antiphon the Sophist: The Fragments* (Cambridge U. P.).

——— (2007), 'The Sophistic nomos-physis Antithesis and Natural Law', in Apostolos L. Pierris (ed.), *Pierris (2007)* (Greece: Patras), 261-68.

Pierris, Apostolos L. (ed.), (2007), *Φύσις and Νόμος: power, justice and the agonistical ideal of life in High Classicism : proceedings of the Symposium Philosophiae Antiquae Quartum Atheniense July 4th - July 12th, 2004. Pt. 1, Papers* (Greece: Patras).

Taylor, A. E. (1941), *Plato: Tha Man and his Work* (Methuen).

Untersteiner, Mario (1954), *The Sophists* (Basil Blackwell).

Weiss, Roslyn (2007), 'Why isn't Antiphon in the *Gorgias*?' in Apostolos L. Pierris (ed.), *Pierris (2007)* (Greece: Patras), 331-54.

Woodruff, Paul (2004), 'Antiphons, Sphist and Athenian: A Discussion of Michael Gagarin, *Anthphon the Athenian*, and Gerard J. Pendrick, *Antiphon the Sophist*', *Oxford Studies in*

Ancient Philosophy, 26, 323-36.
ハイニマン, F. (1983),『ノモスとピュシス』(みすず書房).
田中美知太郎 (1941),『ソフィスト』(弘文堂書房).
――― (1976),『ソフィスト』(講談社学術文庫).
納富信留 (2006),『ソフィストとは誰か？』(人文書院).
――― (2008),「ソフィスト思潮」, 内山勝利 (編),『哲学の歴史　1』(中央公論新社), 245-301.

注

1）ソフィスト・アンティフォンがアテナイ人であることについては，疑われることはあまりない。例外としてドッズ（Dodds 1954）がいるが，ドッズの主張はモリスン（Morrison 1955）によって批判されている（cf. Nill 1985 p.52, p.103 n.2)。

2）「ソフィスト・アンティフォン」と「ラムヌース区のアンティフォン」の同一性をめぐる問題は，両者を別人とする separatist と，同一人物とする unitarian の間で，現在でも論争中の問題である（cf. Guthrie 1871 pp.292-4; Kerferd 1981 pp.49-50; Untersteiner 1954 p.228)。なお，過去の論争については，ルギンビル，アヴェリーなどにリストがある（cf. Avery 1982 p.146; Luginbill 1997 n.2)。最近では，separatist であるペンドリックと unitarian であるガガーリンの間の一連の論争が注目される（cf. Gagarin 1990; Pendrick 1987, 1993)。

3）これはあくまでもソフィスト・アンティフォンの著作に対する一つの解釈からの帰結であり，ソフィスト・アンティフォンは民主派の思想家ではなかったとする解釈もありうる。たとえば，ルギンビル（Luginbill 1997）は，『真理について』および『調和について』の議論は寡頭主義的に読めると主張し，ソフィスト・アンティフォンを寡頭派の政治思想家と位置づけている。

4）ハイニマンも，両著作の著者が同一人物であることを疑っている（cf. ハイニマン 1983 p.157, 165)。

5）ただし，「ラムヌース区のアンティフォン」は，『メネクセノス』236a で言及されている。

6）代表的な研究として，ハイニマンの研究（Heinimann 1945）が挙げられる（日本語訳：ハイニマン 1983)。

7）なお，両著作を対比的に取り上げたウッドラフの書評がある（Woodruff 2004)。

8）収録論文のうち，アンティフォンの思想に触れたものとして，ブーフハイム (Buchheim 2007)，ペンドリック (Pendrick 2007)，ナーシー (Narcy 2007)，ウェイス (Weiss 2007)，ガガーリン（Gagarin 2007）などが注目される。

9）納富信留による『ソフィストとは誰か？』（納富 2006）が登場するまで，ソフィストの思想そのものを中心テーマとした日本人による著作は田中美知太郎の『ソフィスト』（田中 1941, 1976）しか存在しなかったという事実が，この状況を如実に物語っている。しか

し，近年新たに刊行された中央公論新社版『哲学の歴史』第1巻では，納富によるソフィスト思潮全体についての解説が一章を割いて収録されており（納富 2008），状況は変化しつつある。

10）アンティフォンの倫理思想を日本語で論じた文献としては，納富信留によるものが存在する（納富 2008 pp.289-295）。

11）ただし，DK15には，ノモスとピュシスの対立をうかがわせる証言が含まれている（「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（2）」に収録予定の5.2.2を参照）。しかし，アンチテーゼそのものが主題になっているわけではない。

12）この時期における主な研究については，ウンターシュタイナー（Untersteiner 1954 p.228）とムールトン（Moulton 1972 p.330 n.2）を参照。

13）とはいえ，この著作がそのようなアフォリズムの集まりであったと断定することはできない。なぜなら，引用者（主にストバイオス）がそのような箇所を好んで引用した可能性も十分にあるからである。

14）「調和 ὁμόνοια」の概念にどのような意味を読み取るかにより，倫理思想書とするものと，政治思想書とする二つの解釈があり，対立している。詳しくは10.1（「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（3）」に収録予定）を参照。

15）19世紀における代表的な議論を見ると，このことは顕著である。たとえば，ソフィストの思想の再評価のきっかけを作ったグロート（Grote 1850）において，アンティフォンはソフィストのリストの中にはあげられているものの（p.480），その思想が具体的に取り上げられることはない。さらに時代が下がると，アンティフォンは徐々に注目されるようになるが，その話題は限定されている。たとえば，H. ゴンペルツの著作では，アンティフォンの思想に一章が割かれて論じられているが，その話題は（1）アンティフォンの同一性，（2）ゴルギアスの弁論術との異同，（3）エンペドクレスの自然哲学との関連に限られている（Gomperz 1912, pp.57-68）。

16）これ以外にも，いくつかの小断片が含まれるが，これらはいずれも判読不能なものである（cf. Pendrick 2002 p.315）。テキストについてはグレンフェル＝ハントによる校訂（Grenfell and Hunt 1915 pp.100-101）を参照せよ。

17）この点は，ほとんどすべての研究者によって同意されている。主要な例外はビリク（Bilik 1998）。ビリクは，ハルポクラティオンの証言を信頼せず，別著者のものと考えている。しかし，このビリクの見解については，ガガーリンが適切な反論をしており，私はそれを支持する（Gagarin 2002 p.64）。

18）ただし筆者も，後に述べる理由から(b)の方が前だったと考えている。第6章（「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（2）」に収録予定）を参照。

19）「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（3）」に収録予定の第7章を参照。

20）この点は第6章（「ソフィスト・アンティフォンの倫理思想（2）」に収録予定）を参照。なお，この補完はDKのテキストでは反映されていないので，注意が必要である。補完を反映した最新の校訂としてデクレヴァ＝カイッツィ（Decleva Caizzi and Bastianimi

1989)，およびペンドリック（Pendrick 2002）がある。

21）たとえば，ハイニマンは整合性を放棄してしまっている(ハイニマン 1983 p.157)。なお，カーファード（Kerferd 1956-7）は，DK44断片群で提示されている思想はアンティフォン自身のものではなく，彼は第三者の見解を検討しているのだとしている。しかし，ここで提示されている議論をすべて第三者に帰するには無理があるように思われる。実際，カーファードも「利益」と「ピュシス」をめぐる発言はアンティフォンの思想を反映していると考えており（p.32），この点で彼の解釈は一貫性に欠けているように思われる。

22）このような新しい問題の発生によって，アンティフォンの同一性をめぐる伝統的な問題も混沌状態にある。なぜなら，単に文体的な問題だけでなく，思想の内容も問題にできるようになったからである。

23）II.1-3は重複誤写（dittography）と考えられるので削除する。

24）目から光線のような視覚（ὄψις）が発せられることで物が見えるという，古代の視覚理論が背後にあると思われる。

25）このような見方をする論者としては，次のようなものをあげることができる。テイラー（Taylor 1941 p.119 n.1, 271），フィールド(Field 1967 pp.89-90)，ニル(Nill 1985 p.53)，ガスリー（Guthrie 1871 pp.107-113)。これらは，それぞれ様々にニュアンスを異にしているが，基本的にはここにあげたような立場を帰属させてもよいのではないかと考える。

26）この立場を明確に表明した代表的な論者は，ウンターシュタイナー（Untersteiner 1954 pp.251-256）とハヴロック（Havelock 1957 pp.255-294）である。

本研究は，平成22年度関西大学在外研究による成果である。